

NPO JCP NEWS

No. 12 2006. 1.1

・特集 鷹島海底遺跡

鷹島海底遺跡の調査

鷹島町海底遺跡出土遺物保存処理の中間報告

・世界の修復界は今 フランスにおける文化財修復

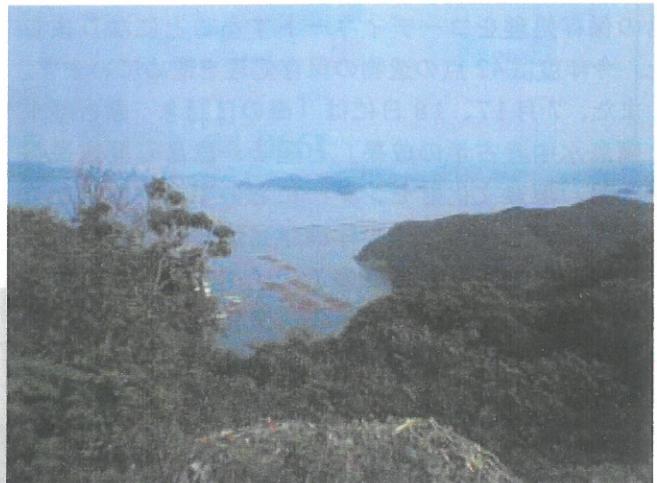
・海外だより アメリカの現場にて

・保存修復の現場から こだわりの道具紹介④ -双眼メガネルーペ-

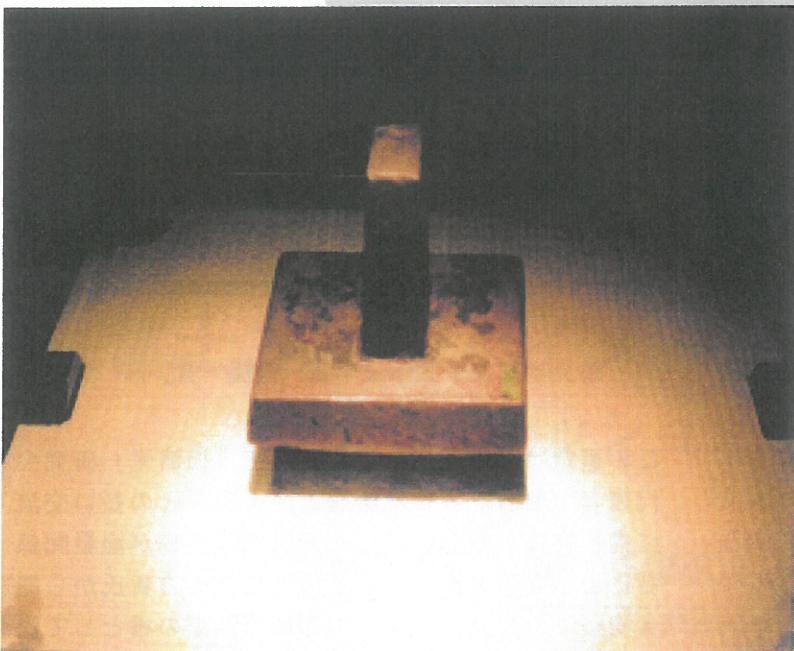
・JCP 事務局通信

特 集

鷹島海底遺跡

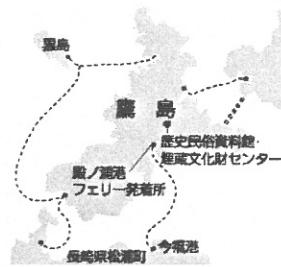


鷹島の海。ここに元寇船が眠る



管軍総把印(長崎県指定文化財)

鷹島海底遺物の保存整備



長崎県の鷹島を知っていますか？

佐賀県東松浦半島の西、長崎県松浦市の北、伊万里湾に浮かぶ人口2,800人余の小さな島です。ここが歴史の教科書で習う「蒙古襲来」の舞台であったことは案外知られていないのではないでしょうか？この島を廻る海域には、「神風」で沈んだとされる元軍の船や武器武具類から、銅錢、陶磁器、漆の椀など生活用品に至るまで、夥しい遺物が眠っています。これらは昭和55年から考古学者によって引き揚げが始まられ、以来鷹島は日本における水中考古学のメッカとなっています。

NPO文化財保存支援機構は、長崎県鷹島町の依頼を受け、平成17年度（財）日本財団の助成金により、遺物の保存処理をコーディネートすることになりました。今年度は42点の遺物の保存処理を進めています。

また、7月17、18日には「海の日記念 蒙古襲来と鷹島水中考古学の成果」と題し、鷹島町歴史民俗博物館、埋蔵文化財センターにおいて、講演会と遺物見学会、子供のための体験学習講座を開催しました。鷹島町と当機構主催のこのイベントには、九州国立博物館の企画課、展示課、文化財課、交流課の先生方、元興寺文化財研究所の研究部の皆様、琉球大学や九州沖縄水中考古学協会の先生方にご協力を頂き、無事終了することができました。特に元興寺文化財研究所の皆様には、はるばる奈良から文化財診断車を運んでいただき、来場者に遺物分析のデモを見ていただきました。海開きの日と重なったこともあって、子供の参加者が少なかったのはちょっと残念でしたが、埋蔵文化財センターのホール天井から吊るされた元寇船の碇や、文化財を診断する分析機器のモニターは、考古学少年少女に夢を与えるに



「海の日記念 蒙古襲来と鷹島水中考古学の成果」遺物見学会

十分なものだったと思います。遺物保存を後押しする一般社会の声を醸成するためには、こうしたイベントを積み重ねていくことも大切なことでしょう。

そして10月16日、ついに日本で4番目の国立博物館、九州国立博物館が大宰府に開館しました。その4階、常設展「文化交流展示」の一角に、保存処理終わった鷹島の遺物たちは並べられました。展示ケースには小さな漣をおこすライティングが当てられ、ブルーの水底を思い起こさせる演出が凝らされています。晴れの舞台に並べられることによって、鷹島ならびに水中考古学が一般に知られるようになり、ひとつでも多くの遺物がケアされて、後世に残されることを願っています。

今回は、鷹島における水中考古学発祥の経緯を、水中考古学の第一人者、跡見学園大学教授 荒木伸介先生に、また遺物の保存処理について、当機構理事 増澤文武先生に報告して頂きます。

鷹島海底遺跡の調査

昭和55年7月からの3ヵ年計画で鷹島南岸の調査は始まった。文部省科学研究補助金の特定研究「古文化財」（代表江上波夫東京大学名誉教授）の中に、茂在寅男氏（東京商船大学名誉教授）の強い働きかけで「水中考古学の方法」が含まれることになり、その実験的場として選ばれたのが鷹島南岸一帯であった。

跡見学園女子大学文学部 教授 荒木 伸介

この選定は、地元伊万里市在住で「松浦党」研究会代表者であった古賀稔康氏と江上教授との長い交流に端を発し、鷹島周辺から元寇関係遺物が漁業関係者によって引き揚げられていることを古賀氏から聞き知って、江上教授がこの海域を調査の場として決定されたのである。

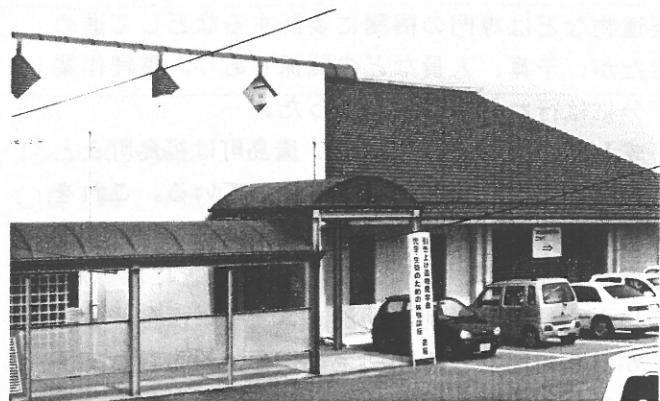
「水中考古学の方法」は「水中遺跡の探査方法（代表茂在寅男）」と「引き揚げ遺物の保存科学（代表江本義理東京国立文化財研究所保存科学部長）」の2つに別れて進められた。

昭和49年8月から、北海道江差町沖に眠る幕末の戦艦「開陽丸」の調査が、わが国初の本格的海底発掘調査として始められており、ここでの成果と鷹島との比較検討が求められた。江本氏は、開陽丸調査の指導委員会のメンバーであり、江本チームは、両者の環境の差、埋蔵されてから今日までの時間的差などの基礎的調査から、引き揚げ遺物保存対策の研究が始められた。

茂在チームは、カラースキャンソナー、サブボトムプロファイラーなどの探査機器を持ち込み、調査が開始されたが、残念ながら既知の開陽丸でどのように反応するかなどの比較検討は行われなかつた。

探査の結果、海底の概略的地形、堆積層の状況などを知ることは出来たが、遺物の存在などは確認できなかつた。次いで、目視による潜水調査が行われ、鷹島南岸一帯の海底にかなりの遺物が残存する可能性が想定されるだけの遺物が引き揚げられた。この引き揚げでは、通常の考古学的手法である表面採集と比較し、やや杜撰であったため、批判を浴びることになったが、この調査結果から、鷹島南岸一帯を「周知の遺跡」として登録し、同時に向後の調査のあり方など、鷹島町教育委員会を中心に長崎県、文化庁の指導の下で検討された。

科学研究費による調査が終わった翌昭和58年には、島のほぼ南岸中央に位置する床波港で、離岸堤の建設設計画が始まり、その事前調査が教育委員会を



鷹島埋蔵文化財センター外観



鷹島町立歴史民俗資料館外観

主体とする調査団によって開始された。

この床波地区を皮切りに、神崎地区、浦下浦など、鷹島南岸一帯の調査が進められ、今日に至っている。調査に関わる経費は、文化庁補助事業、文部省科学研究補助金、あるいは町単独負担、「開発に伴う事前調査」として開発者側の負担などさまざまで、調査の体制も、町教育委員会が主体ではあるが、微妙にその内容も変化し、統一性に欠けていた。

この間に、引き揚げられた遺物等を展示するための施設として、文化庁、長崎県の補助を得て昭和58年には「町立歴史民俗資料館」が開館。引き揚げ遺物の保存処理作業を中心とする「埋蔵文化財センター」も平成6年に建設された。

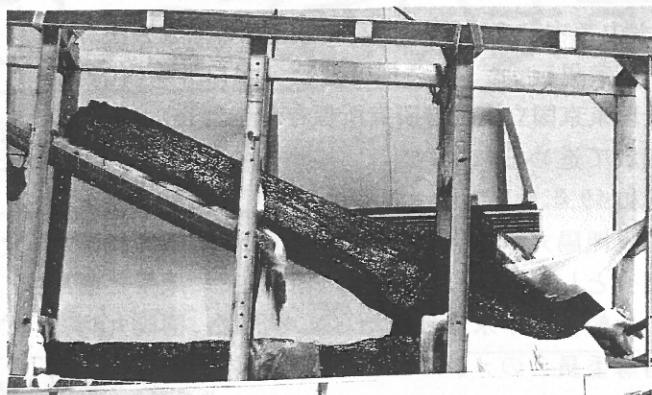
これまでの調査で引き揚げられた遺物の総数は3千点を超える。総重量が1トンを超える碇をはじめ、大きさ、形状、材質も各種多様で、埋蔵文化財センターのみでは保存処理は不可能であり、一部の



歴史民俗資料館展示室に並べられた、保存処理を終了した遺物たち

重要遺物などは専門の機関に委託するなどして進めてきたが、予算、人員などの関係もあり、整理作業も十分には行われては来なかつた。

平成18年1月1日を期して、鷹島町は福島町とともに松浦市と合併することが決定している。これを契機に、今年度までに積み残された遺物等の分類整理、保存処理などについて再検討することになった。幸いにも、特定非営利活動法人「文化財保存支援機構」が日本財団からの補助金を得て、協力参加することになった。また、九州国立博物館が開館し、ここからの要望に応じて遺物を貸し出し、展示資料の一部は同館で処理を行うなど、外部からの強力な支援を受けながら、新しい行政体制の下でも遅滞なく調査、研究、活用が進められるよう準備が進められている。



引き揚げられた碇(左)と
てつはう(右)



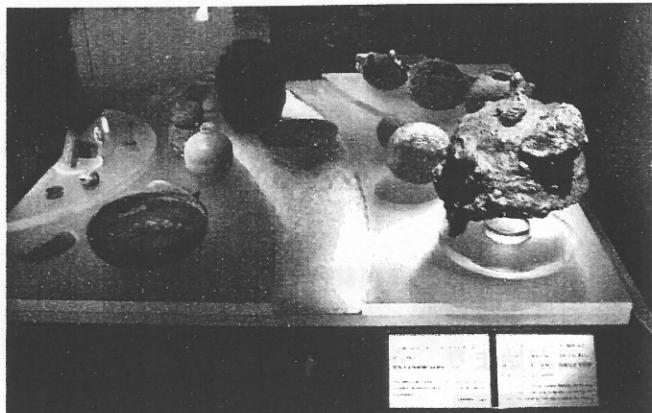
鷹島町海底遺跡出土遺物保存処理の中間報告

NPO 文化財保存支援機構理事 増澤 文武

長崎県鷹島町（本年1月1日松浦市に合併）海底遺跡出土遺物の保存処理の大きな目的のひとつは、昨年10月九州国立博物館（以後九博と記す）の開館にあわせて展示資料とすることを機会に、発掘後長きにわたり水漬けの状態にあった遺物を保存処理することである。さいわいその一部は保存処理を終了し鷹島町歴史民俗資料館で1週間展示され、九博の常設展示品として多くの展観者に見て頂いている。保存処理対象遺物は、蒙古鉢（冑）と銅製飾金具、擬宝珠など出土金属（鉄・銅合金）製品、ならびに胡録と矢束、銘文入り漆器、朱塗櫛、木像など木漆製品で総件数42件である。

保存処理方針は①九州国立博物館の開館展示に間に合うよう処理を進められること、②鷹島町九州国立博物館の要望に答え得ること、③処理中異常を生じた際、即当機関の担当者に連絡を取り対応すること、④それには近くに分析など可能な研究機関があること、⑤保存処理終了後に保存処理工程、使用薬剤などをつづがなく記した報告書を作成すること、⑥鷹島町が求めた場合には、当機関が本件に用いた技術の移転をはかること、ただし、それらにかかる費用は別途協議すること、⑦施工にあたっては当機関の会員の所属する機関ないしは賛助会員とすること、を柱とした。その結果、上記条件に同意した上で期間内での保存処理が可能な（株）京都科学に委託した。

X線透過写真ならびに肉眼観察から砂に覆われた



九州国立博物館での展示

蒙古鉢や矢柄は、冑や矢尻の鉄部分、矢柄そのものを確認出来ず、砂内部の空洞化が懸念されたため、表層部の砂層を残すことにしたが、作業中矢柄が発見され木質であることが判明した。含浸樹脂として、蒙古鉢にはアクリル樹脂、銅製遺物には銅の安定剤ベンゾトリアゾールを含むクリアーラッカーを、木製品・漆製品については処理期間の短縮化を計り、糖アルコール法を採用した。開館に向けた展示物については9月上旬に含浸処理が終了し、展示ならびに安定化のための台を作成し9月26日、沢田正昭会員（つくば大学／保存科学）、今津節生会員（九博／保存科学）による当機関の検収を終了し、蒙古鉢、擬宝珠、飾金具、「帳（花押）」銘刻書朱漆椀、朱塗櫛など14点を9月30日鷹島町に返却した。

それら以外については、現在保存処理が順調に進行中であり、3月末には返却できるものと考えている。

「フランスにおける文化財修復」

I 保存修復家のトレーニング

保存修復家という仕事は、広範な知識と技術、すなわち美術に対する正確な認識、化学ならびに材料の物理学的要素への理解、そして少なからぬ熟練した技術が要求される高度に分化した専門職です。今日、保存修復家が目指しているのは、長い年月の痕跡が刻まれた対象物を想定される「元の」状態へ技巧を駆使して修復することではありません。保存修復家の仕事は、保存に値する過去の刻印を受け入れながら、美術品の寿命を延長し、その判読性と信頼性を大事に守るという困難な仕事なのです。

フランスには、このような保存修復家を養成する政府公認の保存修復学校が4校創設されています。その最古参が1973年に創設されたMST(master of sciences and techniques)です。1977年にはIFROA(French institute for the conservation of works of art)が創設され、1996年にINPに合併されました。1981年には、Ecole d'Avignonが開校し、1985年にはツール州立美術学校に彫塑保存プログラムが設けられました。この4校では、専門家として要求される技能、そして学術プログラムに要求される学力を有しているかどうかを入学試験によって判断し、学生を選抜しています。このようなプログラムの目的は、美術史家、技法史家、考古学者、科学者と一体になっての保存修復への学際的アプローチを強化することです。

MST

MSTは、パリにあるソルボンヌ大学の一部です。このカリキュラムには毎年およそ20人が選抜され、その期間は4年間です。初年度には、美術史や保存修復家に必要な科学、予防的修復を学び、絵画、用紙、陶器および彫刻に関する実習を受講します。2年度になると、絵画(イーゼル絵画と壁画)、グラフィックアート(ペーパーと写真)、彫塑、建築物および装飾物の中から自分の修復科目を選択します。この学校ではステンドグラスや楽器など趣を異なる修復科目を受け入れていますが、その場合の実地研修は民間の修理工房で実施されています。3年度までに、学生は科学、美術史、文化遺産に関する法律や伝統技法を継続して研究し、また修復を実習します。4年度になると6~9ヶ月の長期実務研修が組み込まれています(研修地は通常、海外の美術館です)。学生たちが作業した作品は、審査員に提示され、その結果に

応じて卒業証書が与えられます。

INP

INP(national institute of cultural heritage)は、学芸員と文化遺産の保存修復に関するトレーニングを提供しています。

この学校には2つの学部があります。パリの中心にある学芸員を対象とする学部とパリ北部(サンドニ)にある保存修復を対象とする学部です。このため、2つの専攻学部間では定期的な交流と議論が盛んに行われています。この学校の入学希望者は、受験時に自分の専攻する分野をグラフィックアートまたはテキスタイル、絵画、写真、彫刻の中から選択する必要があります。従って、入学試験は専攻分野ごとに異なります。毎年、およそ20名が選ばれます。

INPは、材料に関する技術論、古い時代の技術の演習、美術史および修復に関する化学などの学術面を含んだプログラムを提供します。また、3年次までに実際の修復に関する課程やフランス国内外における研修もあります。学生はそれぞれ、4年次に自分が学びたい修復専攻課題を選択します。美術館のコレクションの中から1つまたはいくつかの作品を選んで、歴史的側面および科学的側面からの調査を行います。この調査の結果に基づいて、最良な処理方法を決定し、その作品の修復を行います。そして、年度末に審査員から評価を受けます。

INPは、海外の同じような施設からも学生を受け入れています(両校の合意により、学部における課程が有効であるとされた場合)。また、保存修復家を雇っている各機関からの推薦に応じて修復施術者も受け入れています。

この数年間に、中国やドイツ、イタリア、リトアニア、ポーランド、ロシア、チュニジアからの若い保存修復家がINPで訓練を受けました。

この訓練コースの期間は3ヶ月で、その内容は、学部の研修生それぞれの必要に応じて構成されます。授業には、講義や実地、フィールドワーク、研究所での調査、文献の研究などがあります。

Ecole d'Avignon (エコール・ド・アビニヨン)

この市立学校は、フランス南部にあり、絵画修復と美術を職業にすることを望む学生を養成しています。入学試験後、学生は1年間美術に関するトレ

ニング（ドローイング、ペインティング、写真、ビデオ）を受けながら、美術史と修復の科学について学びます。次に、美術を専門とするのか、修復を専門とするのかを選択します。保存修復プログラムの期間は4年間で、科学、美術史、材料に関する技術論に加えて、実践的なトレーニングが行われます。最終年度は、専攻の修復に関する課題の研究と1点の絵画の修復を中心に学びます。学生はそれぞれ、自分の担当した絵画を処理する方法を研究し、その成果を審査員に提示します。

Ecole superieur des beaux-arts de Tours (ツール州立美術学校)

この美術学校は、フランス西部にあり、5年間の彫塑修復プログラムを提供しています。このプログラムは、材料の歴史的ならびに科学的研究を伴った実践的な演習と彫塑の構造を組み合わせたものです。毎年、5名の学生が選ばれます。去年は、歴史的および科学的リサーチを含む修復プロジェクトが行われました。このリサーチの成果と彫塑の修復が、卒業証書を得るために審査員に提示されます。

保存修復家は、民間の工房でもトレーニングを受けることができます。このような工房は、一般に従業員数が1～4名くらいの小規模なものです。しかし、就職については卒業証書を持っていないということがよく障害になります。

フランスにおける保存修復家の求人状況に関しては、次号(NPO JCP NEWS No.13)でご紹介する予定です。

日訳：田中寿子（ティーピーエスシステム株式会社）

ヴァレリー・リー氏 プロフィール

ソルボンヌ大学において美術史学位取得。

1996年INPよりペーパーコンサベーションの修士取得。

2003年まで、アメリカ合衆国フリアーアンドサックラーギャラリーにおいて、アシスタントコンサヴァターとして、中国絵画の保存に従事。

その後フランスにおいて美術館の西洋アジア素描コレクションを中心に活動。

現在NPO文化財保存支援機構(JCP)の登録会員として、東京国立博物館文化財部保存修復課に派遣され、同博物館収蔵品のうち、特に東洋美術の応急修理に携わっている。

Conservation in France

I Training conservators

Valerie Lee

Conservation is a highly specialized profession that calls for extensive knowledge and skill: a true awareness for the arts, an understanding of the chemistry and physics of materials, and considerable manual skills. Today, a conservator's aim is not to restore, through artifice, an object marked by the passage of time to its supposedly 'original' state. His difficult task is to prolong its existence, preserve its legibility and authenticity while accepting those signs of the past which are worth keeping.

In order to achieve such a professional expertise, 4 government accredited conservation schools were created in France. The first one was the MST in 1973, then the IFROA in 1977 that merged in 1996 with the INP. The Ecole d'Avignon was opened in 1981 and in 1985 a sculpture conservation program was created in the state art school of Tours. Conservation students are all selected through an entrance examination, however, specific admission requirements differ from school to school. Prerequisites for admission include knowledge in science, art history and studio art. The schools aim to encourage interdisciplinary approach to conservation with art historians, historians of techniques, archaeologists, and scientists.

MST (Maîtrise de Sciences et Techniques)

The MST (master of sciences and techniques) is part of the Sorbonne University located in Paris. The program takes on average 20 students per year and is 4 years long. During the first year, students learn art history, sciences for conservators, preventive conservation and do practical work on paintings, papers, ceramics and sculptures. From the 2nd year they specialize in a particular type of object such as painting (easel and wall painting), graphic art (paper and photography), sculpture or archeological and decorative objects. Different conservation specialties such as stain glass conservation or musical instruments conservation have been accepted by the school but the hands on

training has been done in private conservation studios. Up to the 3rd year, students continue to study science, art history, law of cultural heritage, traditional techniques and practice conservation. The final year is a 6 to 9 months long internship in a museums. The work that was done during the internship is presented to a jury in order to get the school diploma.

INP (Institut National du Patrimoine)

The INP (national institute of cultural heritage) provides training for curators and conservators of cultural heritage.

It has two academic divisions, situated in the center of Paris for the curators and in the northern part of Paris (Saint-Denis) for the conservators. This promotes regular interaction and discussions between the two professions. People who are taking the conservation entrance exam need to choose their conservation specialty from graphic arts, textiles, furniture, painting, photography and sculpture. The entrance exam is therefore different from one specialty to another. Twenty students are selected on average per year.

The INP offers a 4 years program that includes academic courses such as technology of materials, practice of early techniques, art history and science for conservation. There are also practical conservation courses and internships in museums in France and abroad during the first 3 years. An in depth study of a specific conservation problem is carried out during the 4th year. Each student chooses his subject (it could be the treatment of tracing paper for example) and select one or several objects from a museum collection accordingly. The study includes a scientific research and an historic research. Following the results of the study, a full treatment is carried out on the art objects. The work is assessed by a jury at the end of the year.

The INP is also open to international students from similar establishments abroad (in which case the course at the Department is validated by an agreement between the two schools), or to practitioners recommended by the institutions employing them. Over recent years, young professionals from China, Germany, Italy, Lithuania, Poland, Russia and Tunisia have been trained at the Institute.

The training courses last three months and are customized to the needs of each trainee by the Department. The course may include lectures, practical sessions, field work, laboratory or document research work.

Ecole d'Avignon (Scool of Avignon)

This city school located in the south of France prepares students for oil painting conservation or fine art degree. Students receive an artistic training (drawing, painting, photography, video), and study art history and conservation science for a year. Five students can then apply for the conservation program. This program is 4 years long and offers practical training as well as sciences, art history and technology of materials. The last year is focused on the study of a specific a conservation problem and the conservation of a painting. Each student will research solutions to treat their painting and will present their work to a jury.

Ecole superieur des beaux-arts de Tours (The state art school of Tours)

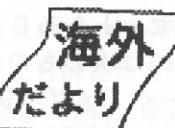
This art school located in the western part of France is offering a 5 years long sculpture conservation program that combines practical

experience in conservation with historic and scientific studies of the materials and construction of sculptures. Five students are selected each year. The last year is devoted to a study that includes an historic and a scientific research on a specific conservation problem. A treatment of a sculpture is also carried out through to completion. The work is presented to a jury in order to get the diploma.

Students who do not want to apply for a conservation school can be trained in private studios. Those studios are generally small scale with 1 to 4 conservators working there. However, the lack of diploma is often a handicap as we will see in our next article about the conservation job market in France.

Profile

Valerie Lee received a B.A. in art history at the Sorbonne University and a M.A. in paper conservation from the INP in 1996. She specialized in Chinese painting conservation at the Freer and Sackler Galleries (Smithsonian, U.S.A) where she worked as a assistant conservator until 2003. She is working for French museums on Western and Asian drawing collections and is currently a member of JCP. She is now working as a contract conservator at the department of conservation of the Tokyo National Museum and carries out remedial repairs and care on the Asian painting collection.



アメリカの現場にて

高井 敬子

(JCP登録会員)

昨年の6月より、米国ワシントンD.C.にある東洋絵画修復スタジオ「Nishio Conservation Studio」にて装こうの仕事をしております。今回海外ならではの現場の声をとのご依頼を受けまして、こちらで仕事を始めてからのことなど思いつくままに書かせてもらおうと思います。

私が仕事をしている「Nishio Conservation Studio」はアメリカでも数少ない東洋絵画専門の修復スタジオで、全米各地の美術館からの仕事をはじめ、個人のクライアントからの依頼も少なくありません。やはり中国、日本の掛け軸、屏風といった物が仕事の主流ですが、そんな中でも時にチベット仏画のタンカや中近東の古い証明書など、日本では手がけることのなかった国の作品が持ち込まれることもあります。また、美術館から修理を依頼される作品は歴史的、芸術的に価値のはっきりした物が多いのに対し、個人の所有者からの依頼品の中には、いわゆる「文化財」の範疇にはいらない作品もときに見受けられます。しかし作品に対する所有者の思いがそれだけ純粋なため(そして私が最も興味深く感じる点もあるのですが)、やはりおろそかな仕事はできないと思うのです。4枚折の屏風を持ってきたある御婦人は、「小さいとき、祖父の家にあったこの絵に穴を開けてしまったのを覚えているけど、祖父が亡くなつてからこの屏風を譲ってもらって、自分の開けた穴を治してもらいにきたわ」とその屏風を修理のために置いていかれました。また肉筆美人画の小品の表装替えを依頼されたあるご夫婦は、表装裂の取り合せを決めるその日、娘さんと3人でスタジオを訪れ、私た

ちスタッフと一緒に長時間を取り合せたために過ごされていました。

アメリカは歴史の新しい国だから古い物を大事にする、とよくいわれます。これらの現場で接する所有者らの姿を通して、彼ら自身「Sentimental Valueだから」とはつきり口にし、予算を気にしつつも、「この作品をこれからも長く楽しむために修理するのだ」というその気持ちが伝わってきます。海外で装こうの仕事をしていく上で、劣化絹等の材料の不足や、保存環境の違い(個人宅では特に冬場の乾燥が激しい場合が多い)、所有者自身がどこまで適切に掛け軸を扱ってくれるだろうか、など日本では感じなかつた課題や不安がやはり多々あります。しかし、少なからぬアメリカ人が日本をはじめとする東洋美術品を所有し、さらにそれらを後世に残すべき物として、スタジオを訪れてています。アメリカにはるばる渡ってきたこれらの美術品の果たす役割を思うたび、私もこの作品たちのように異国の地で装こうの仕事をしている日本人として、異文化理解の一端を担えれば、と日々の目標も新たになるのです。

高井敬子さんプロフィール

1995年9月～米国 Maryland College of Art and Design 在学
1997年5月
1997年11月～石川県 装こう文化財修復室 表阿弥勤務
2004年4月
2004年6月～米国 Nishio Conservation Studio 勤務
現在に至る

保存修復の現場から

「こだわりの道具紹介③—双眼メガネルーペー」

渡邊 務 (JCP登録会員)

修復現場で主に補彩を行って20数年。絹や紙の繕い部分に筆と絵具を道具として色を塗ってきましたが、近年はそれ以外にもいろいろな道具類が増え、時にそれらを活用してきました。そのなかでも私の必需品と思われる双眼ルーペについてご紹介させていただきます。

写真-1 が取り付けた状態です。私は近視のメガネをかけているので、その鼻あて部分の上部にクリップではさみ、アームの先についた双眼のプラスティックレンズの角度や、アームとメガネの傾きを調整し使用します。メガネをかけて双眼ルーペを通して見ると拡大された画像を見ることができ、視線を移動すると通常メガネかけたときの画像を見るることができます。

最初は目と目の間に少し違和感を感じますが、軽量のため違和感が薄らいでいて、この双眼ルーペを装着したまま歩き回ることもできます。倍率は2~3倍で、重さは約20グラム位です。クリップ部とアーム、アームと双眼レンズ部が可動になっており、折りたたんでコンパクトになります。ヘッドルーペというものもありますが、180グラム位の重さで、コンパクトにはなりません。

それではいくつか市販されているものを紹介します。まずYahoo!ショッピングにドイツのエッシェンバッハ光学のワークルーペクリップタイプ（写真-2）が載っています。これは¥12,180（税込）と高級品です。以下にこの解説を記載します。エッシェンバッハのルーペは、アコマートレンズを除いて殆どのものは「PXM」という高品質のプラスティック素材でつくられており、その表面は最新技術を生かした「セラティック」多層コーティングによって被

膜され傷から保護されています。「PXM」は、高品質なレンズに要求される特性、すなわち（1）透明度、（2）純度、（3）硬度を兼ね備えたレンズをつくりだすために選び抜かれた材料です。同じ成型品でも、アクリル製のレンズの場合、年数が経つと変色し透明度が落ちるという苦情を聞きますが、「PXM」レンズの場合そのような心配はありません。倍率は1.7倍と2倍のレンズ付です。

アクセス先 <http://store.yahoo.co.jp/kirara/>

次に楽天市場のものを紹介します。写真-1が双眼メガネルーペクリップ式です。材質はプラスティック・他で、レンズはアクリルレンズです。2倍で19グラム、¥3,800（税込、送料別）。2.5倍で21グラム¥3,800（税込、送料別）。3倍で25グラム、¥4,000（税込、送料別）。クリップ式のセットもあります。

またメガネをご使用でない方には次のものがあります。写真-3の双眼メガネルーペ メガネ式です。これは2倍、2.5倍が¥4,800（税込、送料別）で、3倍が¥5,000（税込、送料別）です。

アクセス先 <http://www.rakuten.co.jp/loupe-studio>

以上何種類かの双眼ルーペをご紹介しましたが、身近な所では、ホームセンターにもあります。私が使用しているのは、ホームセンターで買ったもので、形は写真-1や写真-2と類似しております。日本製で、「シンワ測定株式会社」の「ルーペX ホビー用」2.5倍のものです。¥1,344（税込）で重さは18グラム、レンズはアクリル樹脂です。気になるところといえば、クリップ部とアームやレンズとアームの可動部分が少し弱いかなと思っています。これを3年程使っており、出張の折にも折りたたんで道具入れに入る為、仕事道具の必需品になっています。

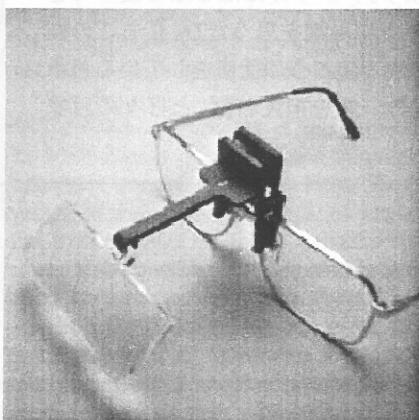


写真-1

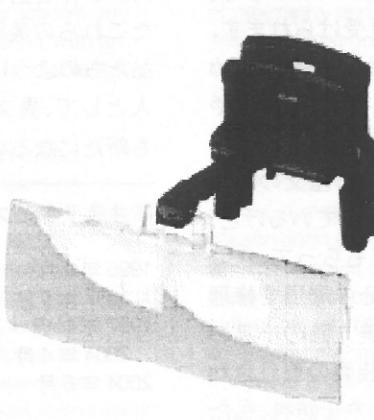


写真-2

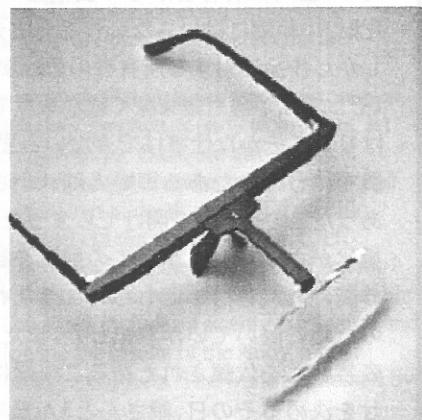


写真-3

JCP事務局通信

NPO文化財保存支援機構 第13回月例交流会

「古書籍の装幀形態と修理」

○講 師：吉野敏武氏（宮内庁 書陵部）

○内 容：宮内庁書陵部で長年古書籍の修復に携わってこられた吉野敏武氏に、古書籍の多様な装幀形態を解説して頂くと共に、それぞれの形態に応じた修理について講義して頂きます。

○日 時：平成18年1月28日（土）

○会 場：江戸東京博物館 第一学習室

（墨田区横網1-4-1 TEL：03-3626-9974）

○参加費：会員 2,000円 非会員：3,000円

○定 員：30名

※お申込み、お問い合わせはメール

jimukyoku@jcpnpo.org

あるいは、03-5363-4533 FAX 03-3341-8577まで。

文化財保存修復学会 防災シンポジウム

「文化財の防災を考える」

○主 催：文化財保存修復学会

○日 時：平成18年1月21日（土）13：00～16：45

○場 所：静岡県立美術館 講堂

（静岡市駿河区谷田53-2）

※入場無料 事前登録不要

○お問い合わせ：文化財保存修復学会事務局

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

昭和女子大学光葉博物館気付

TEL:03-5432-0620 FAX 03-5432-0622

E-mail:jsccp@sepia.ocn.ne.jp

東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター主催

第29回 文化財の保存及び修復に関する国際研究集会

「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」

コロキウム シンポジウム

（コロキウム）

○日 時：平成18年1月24日（火）～26日（木）

○会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター
国際会議場（東京 代々木）

○対 象：文化財研究 保存に携わる専門家 学生
(200名程度)

○プログラム（予定）：

セッション1 壁画美術とその交流の歴史

セッション2 壁画製作技術の波及；材料と絵画技法

セッション3 シルクロード周辺地域における壁画保
存の現状と課題

（シンポジウム）

○日 時：平成18年1月28日（土）

○会 場：東京国立博物館平成館講堂（東京 上野）

○対 象：一般（400名程度）

※詳細 参加申し込みはホームページ

<http://www.tobunken.go.jp/~kokusen/>

をご覧下さい。

東京国立博物館 特別展

書の至宝－日本与中国

王羲之、欧阳詢、蘇軾、空海、小野道風、本阿弥光悦、良寛一

名筆、時空を超えて一堂に。

○会 期：2006年1月11日（水）～2月19日（日）

○会 場：東京国立博物館 平成館（上野公園）

○開館時間：9:30～17:00

○休館日：月曜日

○観覧料金：一般 1,400円(1,200／1,100円)、

大学生 1,000円 (900／800円)、

高校生 900円 (800／700円)、

中学生以下無料

九州国立博物館 開館記念特別展第二弾

「中国 美の十字路」

○会 期：2006年1月1日（日）～4月2日（日）

○会 場：九州国立博物館（福岡県太宰府石坂4-7-2）

○開館時間 9:30～17:00

○休館日 月曜日（1月2、9日は開館。10日は休館）

○観覧料金 一般 1,300円(1,100円)、

高大学生 1,000円 (800円)、

小中生 600円 (400円)

※（ ）内は前売り／20名以上の団体料金

香川県被災文化財救援基金 経過報告

最終募金額：383,000円 (191.5口×¥2,000)

支出：

調査 活動旅費補助 延べ13名 ¥315,970

ボランティア保険 (@¥300×延べ16名) ¥4,800

消耗品（紙類等）¥7,350

備品（掃除機等）¥42,315

手数料その他 ¥5,330

通信運搬費 ¥2,640

残高 ¥4,595

※ご寄附を下さった皆様、暖かいおこころざしをどうもありがとうございました。

活動記録：当機構ホームページに最新の活動報告が掲載されています。どうぞご覧下さい。

URL】 www.jcpnpo.org

ご入会ありがとうございました。

(平成17年12月20日現在入会者数)

□理事 6名 □運営会員 16名

□登録会員 167名 □一般会員 110名

□賛助会員 23件

(株)宇佐美松鶴堂

(株)岡墨光堂

(株)和蘭画房

桂文化財修理工房

(財)元興寺文化財研究所

京都造形芸術大学 歴史遺産研究センター

(株)芸匠

(株)光影堂

コンテンツ株式会社

(有)坂田墨珠堂

(株)修美

宗教法人 正法院

靖斎文化財保存研究所

日本通運株式会社美術品事業部

長谷川和紙工房

(株)半田九清堂

百元 節

(株)文化財保存

(有)文化財修復技術研究所

溝川商店

他個人3名

(アイウエオ順 敬称略)

NPO JCP の活動に

参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費 一口50,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典 季刊情報誌の送付

講演会 / 研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL/FAX:03-5363-4533

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL:www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

UFJ銀行 四ツ谷支店 普通預金 3960340

編集後記

●明けましておめでとうございます。さて、珍しく予定通りに正月号と相成りました。これを機に、少し表紙を変えてみましたがいかがでしょう。今年こそ予定通りに4号出したいものですが、どうなりますか。何はともあれ、今年もよろしくお願ひいたします。(嶋)

●新年明けましておめでとうございます。

今年から体裁も変わり、真新しい気分でニュースレターをお届けいたします。おかげさまで会員件数は320件を突破し、事務

所に入りしてくださいる常連さんも増えてまいりました。しかし組織が大きくなればなるほど、周縁を囲んで下さっている会員の声に、より耳を傾けなければ、という思いを強くしています。今年はさまざまな方々にもっと表舞台に出ていただけるような仕掛けをしてみたいと思っています。いつも東京／京都でばかり…と思ひの方、ぜひ地域の文化財に関する相談をお寄せください。何ができるか、一緒に考えてまいりましょう。(M. Y.)

NPO JCP NEWS

第12号

2006年1月1日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒160-0003

新宿区本塙町22番地102号

TEL:03-5363-4533 FAX:03-3341-8577

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

〈理事事〉

三輪 嘉六 (理事長)

大林 賢太郎 (副理事長)

西浦 忠輝 (副理事長)

伊原 恵司

白井 久明

増澤 文武

〈編集協力〉 嶋根 隆一 (伝世舎)

〈事務局〉 八木 三香 (事務局長)

松本 洋子